

# 新学習指導要領生活科における 動物飼育の指導の充実に向けて

渋谷 一 典

## はじめに

令和2年度、小学校において新学習指導要領が全面実施となった。平成29年3月に新しい学習指導要領が告示されてから1年間の周知・徹底期間と2年間の移行措置期間を経て、満を持してのスタートとなるはずだった。

しかし、新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴う全校一斉休業という前例のない事態に直面し、学校現場は周到に練り上げてきた教育課程の見直しを余儀なくされたばかりか、学校再開後においても様々な活動上の制約の中で教育活動を工夫しなければならない状況にあり、学校における動物飼育に関する活動についても少なからず影響を受けていると考えることができよう。

## 1 学習指導要領改訂の要点

学習指導要領は、時代の変化や子供たちの状況、社会の要請等を踏まえ、これまでおおよそ10年ごとに改訂を繰り返してきた。

今回の改訂に当たっては、「中央教育審議会答申（平成28年12月21日）」において、学校教育が長年育成を目指してきた「生きる力」を改めて捉え直すとともに、それらに取り組んできたことの強みを発揮できるようにする必要が求められていることに注目する必要がある。この「生きる力」は、「予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力」として明瞭に示されている。

こうした背景を踏まえ、今回の学習指導要領では、各教科等の目標及び内容が、育

成を目指す資質・能力の三つの柱（「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」）に沿って再整理され、どのような資質・能力の育成を目指すのかが明確化された。これにより、教師が「子供たちにどのような力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を図る、いわゆる「指導と評価の一体化」が実現されやすくなることが期待される。

生活科では、学習指導要領で規定された九つの内容の中に「(7)動植物の飼育・栽



培」が位置付けられ、動植物を育てたりする活動を通して育成を目指す資質・能力が明示されている。

そこで本稿では、「学習指導要領解説生活編」における内容の(7)に関する記述、及び『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料「小学校生活」を参考にしながら、これからの生活科における動物飼育の指導の充実に向け、実際の学習活動における指導と評価の在り方について考えてみたい。

## 2 動物飼育を通して生活科で育成を目指す資質・能力

学習指導要領生活科の内容(7)は、次のような一文で示されている。

動物を飼ったり植物を育てたりする活動を通して、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかけることができ、それらは生命をもっていることや成長していることに気付くとともに、生き物への親しみをもち、大切にしようとする。

この一文には、

- ・動物を飼ったり植物を育てたりする活動を通して〔①学習対象や学習活動等〕
  - ・それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかける〔②思考力、判断力、表現力等の基礎〕
  - ・それらは生命をもっていることや成長していることに気付く〔③知識及び技能の基礎〕
  - ・生き物への親しみをもち、大切にしようとする〔④学びに向かう力、人間性等〕
- の四つの要素が構造的に組み込まれ、うち②③④が資質・能力の三つの柱に対応（右図）している。

このことは、動物飼育の場合、動物の飼育活動を前提にし、その中で対象の変化や成長の様子に関する思考を働かせ、生き物は生命をもっていることや成長していることについて気付きの質を高めるとともに、そうした思考や気付きが生き物に親しみをもち大切にしようとする態度の涵養に向けて発揮されるようにすることを意味している。したがって、実際に単元を構想する際は、それぞれの資質・能力の関係を確認し、それをどのような学習活動を通して実現するのかを見失わないように留意することが大切である。

さらには、三つの資質・能力は、それぞれを個別ではなく、関連させながら育成するよう配慮が必要である。例えば、二年生でモルモットの飼育に取り組む際には、子供たちは一年生でウサギの世話をした経験など（子供によっては、家庭でペットの世話をした経験や、幼児期に虫の飼育をした経験なども）からの知識や技能を少なからずもち合わせている。初めてモルモットという対象に向き合ったとき、これまでの経験から獲得している知識や技能をもとにして、よりよい世話の仕方について判断しようとする。しかし、生き物にはそれぞ

れ固有の生態や世話の仕方があって、身に付けている「知」をそのまま適用することができないため、ここで思考が働く。具体的には、モルモットの育つ場所、変化の仕方、成長の様子に関心をもちながら、固有の特徴を見つけ出したり、これまで関わってきた他の生き物との違いを比べたり、共通点を探したりなどしていく。そして、生き物はそれぞれに固有の育ち方があり、生命をもっていることは同じであるという質の高い理解へと結び付いていくのである。このように資質・能力の三つの柱が関連し合いながら育まれるようなイメージをもって単元を構想してほしい。

| 内容(7)「動植物の飼育・栽培」に関する学習指導要領上の記載                                                                                   |                                                             |                                               |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------|
| 動物を飼ったり植物を育てたりする活動を通して、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかけることができ、それらは生命をもっていることや成長していることに気付くとともに、生き物への親しみをもち、大切にしようとする。 |                                                             |                                               |
| 内容(7)において育成する資質・能力                                                                                               |                                                             |                                               |
| 知識及び技能の基礎                                                                                                        | 思考力、判断力、表現力等の基礎                                             | 学びに向かう力、人間性等                                  |
| 動物を飼ったり植物を育てたりする活動を通して、それらは生命をもっていることや成長していることに気付く。                                                              | 動物を飼ったり植物を育てたりする活動を通して、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかけることができる。 | 動物を飼ったり植物を育てたりする活動を通して、生き物への親しみをもち、大切にしようとする。 |

### 3 動物飼育単元における指導と評価の具体例

目指す資質・能力を確かに育むためには、学習指導のねらいが子供の学習状況として実現されたかについて、設定した評価規準に照らして観察し、毎時間の授業で適宜指導を行うことが不可欠である。そこで、令和2年3月に国立教育政策研究所教育課程研究センターが刊行した『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校生活」で示した事例を基に、指導と評価の具体例について紹介する。

#### (1) 事例の概要

ここで紹介する事例は、内容(7)「動植物の飼育・栽培」の1内容から1単元を構成し、具体的な学習対象とともに評価

規準を設定したものである。

(2) 単元名

「いきもの 大すき」(2 学年)

(3) 単元の目標

モルモットを飼育する活動を通して、  
モルモットの変化や成長の様子に関心

をもって働きかけ、モルモットに合った  
世話の仕方があることや生命をもって  
いることや成長していることに気づき、  
モルモットへの親しみをもち、生き物を  
大切にすることができるようにする。

(4) 単元の評価規準

| 単元の<br>評価規準     |   | 知識・技能                                                                                   | 思考・判断・表現                                                  | 主体的に学習に取り組む態度                                   |
|-----------------|---|-----------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------|-------------------------------------------------|
|                 |   | モルモットを飼育する活動を通して、モルモットに合った世話の仕方があることや生命をもっていることや成長していることに気付いている。                        | モルモットを飼育する活動を通して、モルモットの変化や成長の様子に関心をもって働きかけている。            | モルモットを飼育する活動を通して、モルモットへの親しみをもち、生き物を大切にしようとしている。 |
| 小単元における<br>評価規準 | 1 | ①モルモットの特徴、変化や成長の様子に気付いている。                                                              |                                                           | ①元気に育てたい、仲良くなりたいという思いや願いをもって、モルモットに関わろうとしている。   |
|                 | 2 | ②モルモットも自分たちと同じように生命をもっていること、成長すること、モルモットに合った世話の仕方があることに気付いている。<br>③モルモットを適切な仕方で世話をしている。 | ①モルモットの変化や成長の様子に着目したり、モルモットの立場に立って関わり方を見直したりしながら、世話をしている。 | ②モルモットに心を寄せ、モルモットの様子に合わせて、繰り返し関わろうとしている。        |
|                 | 3 | ④モルモットへの親しみが増し、上手に世話ができるようになったことに気付いている。                                                | ②モルモットとの関わりを振り返りながら、世話をし気付いたことやモルモットへの思い、自分自身の成長を表現している。  | ③モルモットとの関わりが増したことに自信をもち、関わり続けようとしている。           |

(5) 単元構成の意図と評価規準の設定

この事例では、単元の中心となる学習対象及び学習活動をモルモットの飼育とし、第 1 小単元は 4 時間扱いとし、モルモットに関心をもつことと、これまでの動植物の飼育・栽培経験を生かした様々な視点からのモルモットへの気づきを重視したいと考え、「知識・技能①」及

び「主体的に学習に取り組む態度①」の評価規準を設定した。なお、「知識・技能①」は第 2 小単元にかけて継続的に見取るようにしている。

第 2 小単元は、本単元の中心となる活動となるモルモットの飼育を 7 時間扱いで行う。モルモットへの気づきを高めながら働きかけたり、状況に応じて関わり

方や世話の仕方を変えながら飼育を継続したりする姿を見取る適切な評価機会を設定できることから、「知識・技能②③」、「思考・判断・表現①」、「主体的に学習に取り組む態度②」の評価規準を設定した。なお、「知識・技能③」は、モルモットの飼育活動の過程で身に付ける習慣や技能として設定している。

第3小単元は、上手に世話ができるようになったことへの気付きとともに、これまでのモルモットとの関わりを振り返り、世話をして気付いたことやモルモットへの思い、自分自身の成長を、自分なりの方法で表現することと、モルモットへの親しみやこれからも生き物を大切にしようとする態度の育成を重視したいと考え、「知識・技能④」、「思考・判断・表現②」、「主体的に学習に取り組む態度③」の評価規準を設定している。

#### (6) より適切な評価のために

例えば、評価の観点である「知識・技能①」の評価規準は、「モルモットの特徴、変化や成長の様子に気付いている。」という子供の姿で示されている。このような状況をより適切に見取るためには、実際の活動中における子供の姿を、「具体的な子供の姿」として描いておく必要がある。すなわち、「モルモットの特徴、変化や成長の様子」とは、「感触、身体的特徴、行動面の特徴、性格や嗜好」や「モルモットのしぐさや鳴き声」などが考えられる。また、「気付いている」とは、「気付いたことを書いたり発言し

たりしている」姿として具体的に描くことができる。

同様に、観点「思考・判断・表現①」の評価規準は、「モルモットの変化や成長の様子に着目したり、モルモットの立場に立って関わり方を見直したりしながら、世話をしている。」である。このことは、「モルモットの変化や成長の様子に着目したり、モルモットの立場に立って関わり方を見直したりしながら」とは、「モルモットの食べ具合を見て」や「関わったことに対するモルモットの反応を見ながら」、「よりよい世話の仕方に向けて」などといった子供の姿として描くことができる。また、「世話をしている」とは、「えさの種類や量を調節している」や「なでたり、だっこしたりしている」、「獣医師や上級生に聞いたり本で調べたりしている」姿として描くことができる。

#### むすびに

生活科は、具体的な活動や体験を通して学ぶ低学年固有の教科である。目指す資質・能力を確かに育成するためには、資質・能力に関する適切な理解と、それらを見取る適切な評価計画等の充実が欠かせない。今後、動物の飼育に関する学習活動のますますの充実に向けて参考にさせていただきたい。

(文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官)

#### 〔引用〕

- ・「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校生活（令和二年三月国立教育政策研究所教育課程研究センター）

[https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyouka/r020326\\_pri\\_seikat.pdf](https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyouka/r020326_pri_seikat.pdf)